2022年11月20日 川越教会

丸山　勉

愛されて、愛する

［マルコによる福音書10章13～16節]

イエスに触れていただくために、人々が子供たちを連れて来た。弟子たちはこの人々を叱った。 しかし、イエスはこれを見て憤り、弟子たちに言われた。「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。はっきり言っておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」 そして、子供たちを抱き上げ、手を置いて祝福された。

1. **天からの恵みを受けて**

ご存知の方も多いと思いますけれども、沖縄の民謡のような子守歌で、「童神」（わらびがみ）という歌があります。

（歌詞）***てぃんからの恵み 受きてぃくぬしけに　生まりたるなしわ　わみぬむい 育てぃ　イラヨーヘイ　イラヨーホイ　イラヨー　かなし うみなしぐゎ　泣くなよーや　ヘイヨ―　ヘイヨー　てぃだぬ光受きてぃ　ゆういりヨーや　ヘイヨー　ヘイヨー　まささあてぃたぼり***

（意味）***天からの恵みを受けて　この地球（ほし）に　生まれたる我が子******祈り込め育て　愛しい我が子　なかないで　太陽の光を受けて　魂がすこやかに育ちますように。***

うちなーぐちの「まささん（まさしゃん）」は、良い子、優秀な子に、という言葉なのですが、作詞された古謝美佐子さんは（お孫さんが生まれた時）、もっと魂（霊）の成長を願ってこの言葉を歌詞にされたそうです。ですから、この子守歌は、「祈りの歌」と言えると思います。

親は誰もが子供の成長を願う訳ですが、この「童神」の歌がいいなぁと思うのは、まず「天からの恵みを受けて」と歌い始めていることです。つまり、親子関係だけを見ているのではない、天、つまり自分たち人間の超えた存在の恵みがあって、今、目の前のこの赤ん坊も存在しているという、天を見上げながらの歌だと言えると思います。そして、何をこの子に願うかといえば、学力・体力・経済力のことを祈るよりもこの子自身が健やかであるようにです。また、その時の「健やかさ」というのは、病気をしないということではなくて、魂が健やかであるようにということのようです。（古謝さん談）。

1. 主は私たち自身のいのちを喜ばれる

今日は、先ほどの聖書朗読で、主イエス様が、ご自分のもとにやってきた子どもたちを祝福されたという記事が読まれました。

ここで面白いと言いますかリアルだなと思うのは、ここには「常識」とも言える大人中心の考えもしっかり描写されているということです。大人の都合の中で、時に子どもが邪魔になる、ということです。弟子たちもこの場面で「今は子どもの出る幕ではない」と思ったのでしょう（この前の場面ではファリサイ派の人々と、「離縁」についての律法の解釈問答をしています）。しかしイエス様は、弟子たちの思いとは裏腹に、親たちに連れられイエス様のもとへやって来た子どもたちを喜んで迎えられました。そして、イエス様は弟子たちを激しく叱りながらこう言われたというのです。「子供たちを私の所に来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。はっきり言っておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることは出来ない」。

弟子たちは驚いたと思います。彼らは人生経験も多く重ね、それもどこかで誇り、さらにはイエス様に弟子として選んで頂いたという自負のようなものもあったのではないでしょうか？私たち自身も、ともするとそういうことがあるかも知れません。私はイエス様にそれなりに従って来たのだ、時に苦労しながら信仰生活を歩んできた、評価される者がいれば私のようなものだ、と言葉で出さないまでも、どこかそういう思いが生まれてきてしまっているということはないでしょうか？それをイエス様は、お前たち何か思い違いをしていないかい？と、弟子たちの内側を見抜かれ、砕かれているように思えます。この後でこのように書いてあります。「そして、子供たちを抱き上げ、手を置いて祝福された」（マルコ10:16）。是非、今日はこの言葉を心に刻みつけて頂きたいと思うのです。

この聖書を見て分かること。イエス様は、あるがままの子どもを抱き、祝福されたのです。あるがまま、です。子どもにはいわゆる知識もまだ備わっていませんし、社会的に何か生産的なことをしているか、と言ったらそうではありませんよね。でも、それでいいんです！そこにあるのは、「いのち」そのものです。「童神」ではありませんが、「天からの恵み」を受けている、いのちそのものです。私はこの頃よく思うのですけれども、当然と言えば当然なのですが、「いのち」というのは決して外見ではないのですよ。もともと無条件のものです。だから尊い。また「大きい・小さい」でもない。よく子どものことを「小さないのち」と言うことがあったりしますけれども、いのちの価値に大小はない筈です。いのちは「種」のようなものだと思います。あの種粒にはいのちのエキスが詰っている。土の中に埋まっていたけれども、時が来て芽を出したばかりの命もあれば、雨や風にさらされながら、しかし光を受けて時の経過の中で樹木になっている命もあります。「元」は同じです。

イエス様は子どもを抱き上げ、祝福されました。それは、ただ子どもという存在を愛したということだけではないと思います。イエス様は子どもを抱き上げることによって、私たち自身の「いのち」を喜び、受け入れ、祝福して下さっているのです！

1. 神様の信頼。そこから愛が始まる

私たちは、お子さんがいらっしゃる方は皆そうだと思いますが、子どもが幸いであるように願うし、祈ると思います。子どもというのは、本当に無防備で生まれてきますよね。特に人間の赤ちゃんには毛皮もなければ翼もない。丸裸ん坊で生まれてきます。屋外に置かれたままならすぐに死んでしまうでしょう。私は、神様はとても大胆な方だなと思います。親になる者に、無防備な赤ん坊を託されるのです。これは神様の信頼以外の何ものでもないと思います。私があなたにこの子を預ける。あなたならこの子を愛することが出来る、と。

聖書の言う「祝福」というのは、実体のないおまじないようなものとは違います。ある牧師は、「神があなたを祝福すると仰る時、それは、私たちが何の苦労もない薔薇色の人生を歩くことではなく、むしろ責任のある主体として立ち、神の姿を映すものとしてこの地に満ちてゆく、ということを意味しています」と書かれていました。私たちは、神様の形として造られている、ということですね。これだけは、頑として崩れない事実だと、そのことを聖書は、創世記の初めから、人間とは神の息吹が吹き込まれて生きる者となった存在であること、また私たちがどんなに羊のように神様のもとから離れて行っても、神様の方が羊飼いとして捉えて離さないという事実を様々な所で語ってくれています。そして、十字架の死から甦られた主イエス様は私たちに仰いました。「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。だからあなた方は行きなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなた方と共にいる」（マタイ28:18～20）と。

これが神様の愛です。幼な子を祝福されたというのは、繰り返しになりますが、あるがままの私たちが、神様に愛され、祝福されているということです。イエス様は、「（幼な子を）「わたしの所に来させなさい。妨げてはならない」と言われました。イエス様と子どもたち、いえ、私たちを妨げるものは何もないのです。そして、私たちにも、神様の仕事を分け与えてくれるのです。どんな仕事でしょうか？「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」（マタイ22:39口語）という仕事です。イエス様がなさったように、私たちも子どもを時に抱いて祝福をお祈りしたらよいと思います。子守歌を歌ってあげたら良いと思います。

そして、幼い子どもの存在というのは凄いと思います。愛の塊だと思います。親が欠け多い存在であろうが関係ないですね。100％の信頼で親にぶつかってきてくれる。真っ直ぐな目でじい～っと見つめてくれる。子どもを通して神様が私をみつめてくれているんじゃないか、なんて私は本当に思うのです。色んな形で神様は私たちに愛を下さっています。これは所謂「お勉強」では分からないことです。私たちが神様の愛を頂き、支えられ、子どもと一緒に生きる時、それは自然と子どものいのちを支えるものになるのだと思います。「愛」は頭ではなく、ただ体験で身についてゆくものですよね。幼い子どもをそのまま招かれたイエス様。きっとこの時の子どもたちはイエス様に抱かれて笑顔だったに違いないと思います。子どもだけじゃないですよ。私たちも、イエス様の懐の中に飛び込んで行きたい。笑顔にして頂きましょう。そこからお互いの愛が始まると思います。

お祈りいたします。

主よ、あなたは私たち一人ひとりのいのちを祝福して下さいます。そして、あなたに信頼する者を、あなたは誰が何と言おうと拒まれることはありません。あなたの愛は大きいのです。心から感謝致します。主イエス様、私たち自身もあなたに抱かれ、自分自身を愛し、受け入れ、そこから他者を自分自身のように愛していくことが出来るものとして下さい。まず、あなたが共に生きるように置いて下さった身近な者に愛を注ぐ者として下さい。皆さんのご家庭にあなたの祝福が豊かにありますように。主イエス様のお名前によって祈ります。アーメン。